

2017. 7. 5 (水)

人はどのようにして自由になるか

倉 島 哲

皆さんが、自由を最初に感じたのはいつでしょう。私の場合は、お小遣いを握りしめて、お祭りに行ったときです。屋台がたくさん並んでいて、さあ、このお金は何に使おうか、たこ焼きもいしいし、綿菓子もいしいし、おもちゃを買ってもいいし、当て物もいい。何でも選べるといった感覚を持ったときが、自由をはじめて感じたときでした。

なぜ、自由だったかを考えてみると、お金を持っているからです。お金で何でも好きなものを買えるということが自由なのです。

お金がもたらす自由

「貨幣とは、鑄造された自由である」という、ロシアの文豪ドストエフスキーの言葉があります。英語で言うと Money is cast freedom です。cast というのは鑄造されたという意味です。鑄造というのは、型の中に溶けた金属を流し込むことです。「ダイキャスト」という言葉はときどき聞きますね。自由を溶かして、形にして、目に見えるものにしたのがお金だというわけです。

5歳や6歳の子どもでも、お金さえ持っていれば、何でも好きなことができるのです。しかし、よく考えれば、これはおかしなことです。小さい子どもが見ず知らずの大人

に何か言ったところで、大人としては、「ああ、かわいいね」とは思うかもしれませんが、基本的には、いちいち子供の言うことを真に受けることはありません。子供の言うことなど歯牙にもかけないわけです。けれども、その子どもがお金を持っていたなら、一転してお客様です。消費者である限りは自由なのです。

お金というのは、実に不思議なものです。「お客様は神様」だと日本で言います。だから、お金を持っている人は、お金を持っているというだけで大事に扱ってもらえるのです。お金さえ払えば、基本的に手に入らないものは何もありません。今の世の中はそうなっています。結婚するのだって、お金をたくさん持っている相手と結婚したいと皆考えます。食べ物だって、お金さえ払えば、おいしいものをたくさん食べられる。着るもの、住むところ、車でも、お金があれば自由に手に入ります。こう考えると、貨幣は鑄造された自由であるというのは、本当にそのとおりだという気がします。

しかし、恐ろしいのは、子供がお金を持っていると、自分が本当に自由であると勘違いしてしまうことです。私がお祭りで感じたように、自由の楽しさをかみしめると、自分自身の属性として、パーソナリティないし人格

として自由であると錯覚してしまうのです。ところが、この自由はもちろん本物ではありません。お金が自由にしてくれるだけなのです。だから、たとえ楽しいお祭りであっても、お金を持っていない子どもは、「おまえがそこにいて、他のお客さんが近寄れないから、どっか行け」というふうに追い払われてしまうわけです。

お金がもたらす自由を、本当の自由と勘違をしたまま子どもが育つと、ろくなことになりません。皆さんも気を付けましょう。あまりお小遣いをあげ過ぎるとよくないです。

社会がもたらす自由

ここで、たとえかりそめの自由であっても、お金が自由をもたらししてくれるということをもう少し深く考えてみたいと思います。というのも、ここには自由の本質が隠れているからです。私たちは普通、「自由な人」や「自由ではない人」と言い方をします。たとえば、奴隷は自由ではないし、自由人というのは自由な人ですよね。また、近代市民社会に生きる人は、だれでも原則として自由であると言われていました。このように、私たちは自由というものを、一人ひとりの人間の属性として捉えがちなのです。けれども、さきほど述べた、お金を持っている間は自由だけれども、お金をなくしてしまえば自由ではないということは、自由というのは個人の属性ではないということです。

つまり、本来的に自由な人とか、自由ではない人はいないのです。「私は自由だ！」と考えることは勝手ですが、そう考えることと実際にそうであることは違います。お祭りに行く子どもの自由が、持っているお金から来

ているように、すべての自由は、人間に本来備わったものではなく、人間の外から来るものなのではないでしょうか。

ただし、お金だけが自由をもたらすわけではありません。より根源的な見方をするなら、自由をもたらすのは社会なのです。自由というのは、個人の属性ではなくて、社会の属性なのです。つまり、自由な社会や、自由ではない社会はあっても、自由な個人や、自由でない個人というのは、本当は存在しないはずなのです。

身近な経験から考えてみると、たとえば、職場がすごくいい雰囲気、そこにいればやりたいことがやれて、言いたいことが言えて、のびのびと仕事ができるとします。こんなアットホームな雰囲気を持つ職場は、自由な職場と言っていいと思います。家でも同じです。本当にいい家庭、分かり合える家庭は、自由に振る舞える家庭でもあります。それに対して、自由ではない職場、自由ではない家庭もあるわけです。

さて、ここで例として取り上げた職場や家庭は、人々の集まりという意味での社会ではありますが、いわゆる社会ではないことに注意してほしいと思います。つまり、自由というのは個人の属性ではなく、社会の属性であるとお話ししましたが、「自由な社会」があるといっても、それは一昔前まで言われていた「自由な社会」、つまり、資本主義陣営に属する社会のことではありません。冷戦時代は、世界全体を、資本主義の「自由な社会」と、社会主義や共産主義の「不自由な社会」との二つに分けることができたわけですが、ここで話している自由は、こうした社会の捉え方にはそぐいません。

というのは、社会というのは一枚岩ではな

いからです。ある国民国家の全体がひとつの社会を作っていて、それ全体が自由であったり、自由でなかったりするわけではないのです。人が自由であったりなかったりするのには、もっと小さいグループの中です。たとえば、職場だとか、家庭だとか、あるいは友だち関係やクラスであるとか、こういった小さい具体的な集団でこそ、人は自由であったり、逆に不自由を感じたりします。こうした小集団の属性として自由はあると思います。

だから、同じ人でも、どの集団に、どういうやり方で所属するかによって自由であるか、ないかが変わってくる。たとえば、4月にクラス替えがあって新しいクラスに行くと、最初は、みんな緊張していて、誰が友だちになるかな、お弁当は誰と食べようかなと結構ドキドします。そういう状態はあまり自由ではありません。けれども、だんだん慣れてきて、それぞれの位置付け、それぞれのキャラクターが分かってきて、気心が知れてくると、「さあ、遠足はどこに行こう」と話が持ち上がると、「どこどこがいい」などと口々に言えるようになり、自由で活発な、良いクラスになります。

でも、そのクラスの一人が、たとえば就職をしたとします。新しい職場で、周りにはみんな先輩ばかりで、怖そうな上司もいて緊張する。こんな状態は、自由で活発どころではありません。しかし、時間がたつにつれ、だんだん仕事にも慣れてきて、自由になってくるわけです。本当の自由というのは多分こういうものです。個人の属性ではなく、なおかつ社会全体の属性でもない。そうではなくて、特定の小集団とか中間集団の中にいる、その個人が初めて享受できるものです。

プレゼンスとしての自由

では、どうすれば集団のなかで自由になることができるかを考えてみます。まず、小学生ぐらいまでの子どもは、家の中ではあまり自由ではないです。親の言うことを何でも聞かなくてははいけないし、お小遣いだって、そんなにたくさんもらえない。朝、何時に起きて、何時に寝なさい、学校はこうやって行って、これを勉強して、鉛筆を持つときは右手で持ちなさい、ご飯は肘を付けずに食べなさい、右手でお箸を持って、左手はお茶碗を持ち上げて、と結構うるさいことを言われます。それがだんだん大きくなってくると、自由になってくるのです。中学生とか、高校生ぐらいになってくると、大分自由になってきます。大学生になると、かなり自由ではないですか。皆さんも、ちょうどそういう時期ですね。

では、どういうふうにして自由になったのでしょうか。お金を持つことは、特定の具体的な集団の中で少しずつ自由を獲得していくプロセスをすつとばして、消費者、お客様としての自由を一気に手に入れてしまうことです。でも、そういうやり方ではなくて、具体的な集団の中で、自分が自由に振る舞えるようになる、そんな本当の自由というのは、どういうふうにして獲得されるのでしょうか。

その答えをわかりやすく解説してくれたのは、内田樹という哲学者です。神戸女学院で長いこと教えていた人で、合気道もやっている人です。彼は『下流志向』という面白い本を書いています。文庫本で出ているので、皆さんもぜひ読むことをおすすめします。これからお話しするのは、その本に書いてあることです。

子どもが自由を獲得できるのは、集団のなかで貢献することを通してなのです。身の回りの人のお手伝いをしたり、真面目に働いたりして、周囲の人に見直してもらうわけです。「この子は、こんなに役に立つのか」「こんなにお手伝いができるのか」「この子は結構気が利くな」というふうになります。こうして、集団の中で自分のできることや、自分の活動範囲を少しずつ広げていきます。そうすることで、みんなから一目置かれるようになる。「こいつは、もう子どもじゃないな」と思われるようになるのです。

会社でも同じです。新入社員が「この業務のこの辺が合理的ではないので直しましょう」と言っても誰も聞いてくれません。その人が実績を上げて、たくさんの人をお手伝いしていく中で、「この業務はこういうところが合理的ではないから変えましょう」と言うと、みんなちゃんと聞きます。自由というのはそういうことです。

だから、家でも、職場でも、大切なのは貢献です。働いて、その集団のために何か貢献することによって初めて、その本人のプレゼンスというか、存在価値のようなものが高まるわけです。ところで、プレゼンスというのは面白い言葉です。present という英語は、贈り物という意味もあるのですけれども、そこにいるという意味もあります。たとえば授業の出欠をとるとき、absent は欠席していることで、present は出席しているということです。present という形容詞が、名詞になったものが presence ですから、プレゼンスとは、そこにいることの性質ということです。

よく、国際外交の分野で、「日本のプレゼンスを上げなくてはいけない」と言われます

が、これは、武力で脅したり、あるいはお金で相手をひっぱいたりして言うことを聞かせるのとは違います。そうではなくて、まず、日本がこれだけ外国に貢献してきたとか、将来もこういう寄与ができるということを諸外国に分かってもらうわけです。そのうえでなら、日本の静かな発言の一つひとつが重みを持って受け止められるようになり、ひいては、何もせずにただそこにいるだけでさえ、背後から後光が射すような存在感を持ちうるはずで、これが、プレゼンスの獲得です。

子どもが自由を獲得するというのは、プレゼンスを獲得するということです。それは結局、身近な人々に対する貢献を通してしか実現できません。その貢献を認められることによって、一目置かれるようになり、自由が獲得されるわけです。

まとめ

まとめると、皆さんに覚えておいてもらいたいのは、まずお金で自由を獲得するのが一番手っ取り早いということです。けれども、こうして得られた自由は、お金がなくなると同時になくなってしまふ自由です。では、本当の自由はどこにあるかと探し求めて、自由な発想力を身につけようとして、自己啓発したりしてもあまり効果があるとは思えない。本当の自由を与えてくれるのは、結局、自分の身近な人々の作り出す集団なのです。特定の、具体的な集団、目の見える人間関係の中ではじめて自由は意味を持ちます。その中で貢献を積み重ねることでこそ、本当の意味での自由が獲得されるのだと思います。

では、お時間もちょうどのので、これで終わりにしたいと思います。（社会学部教授）